

# 古曾部遺跡発掘調査概要

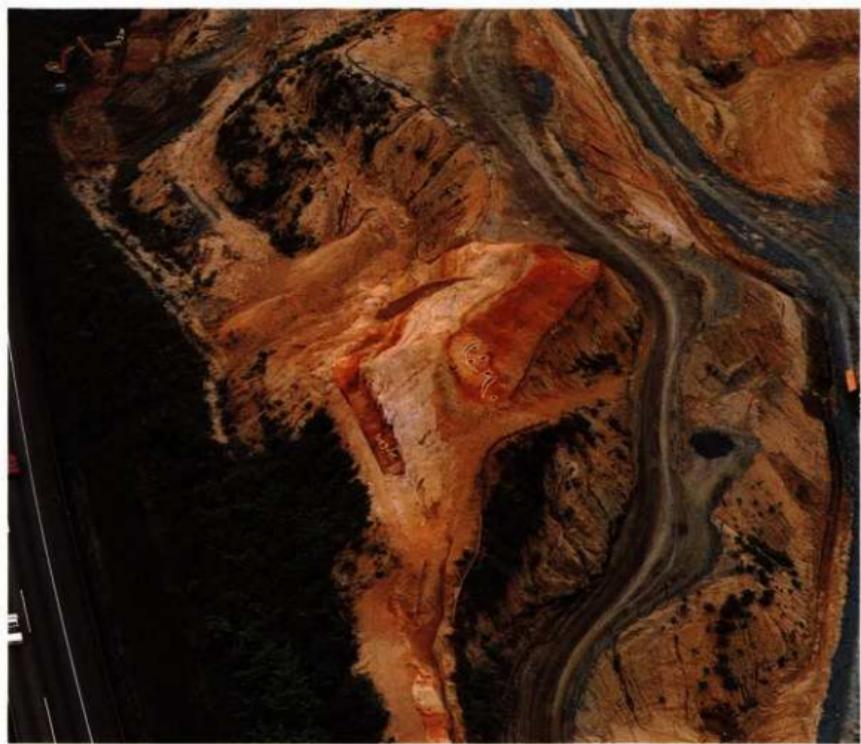


1 9 9 3

高槻市教育委員会



1. 東側から見た調査区



2. 壁穴住居跡と環濠

## はしがき

古曾部遺跡は、高槻市街地の背後に広がる丘陵上にあります。ここは、大阪平野が一望できるだけでなく、遠く六甲や和泉の山並みをも望むことのできる要害の地となっています。一帯はかつて銅鐸の出土した天神山遺跡をはじめ、芝谷遺跡、紅葉山古墳群、星神車塚古墳など、数々の遺跡が集中する文化財の宝庫となっています。平成3年9月から実施しました古曾部遺跡の発掘調査では、急峻な尾根上に掘削された大規模な環濠を巡らした弥生時代後期初頭の高地性集落を検出し、従来知られている遺跡の範囲が大きく拡がることがわかつてまいりました。

このようななか、高槻市教育委員会では名神高速道路の車線拡幅工事にさきだって発掘調査を実施いたしました。このたびの調査でも、弥生時代後期の竪穴住居跡や大規模な環濠を検出し、また古曾部遺跡が隣接する芝谷遺跡や奥天神遺跡と一体となって活動していたことがうかがえるなど、多くの成果をおさめることができました。本調査の成果が今後の高地性集落研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査ならびに本報告書の刊行にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心から感謝の意を表します。

平成5年3月

高槻市教育委員会

社会教育課長 森川久男

## 例　　言

1. 本書は日本道路公団が改築を予定している中央自動車道西宮線の改築に伴う、大阪府高槻市古曾部町に所在する古曾部遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 事業は、高槻市教育委員会が日本道路公団大阪建設局の委託を受けて、直営事業として実施し、平成4年7月6日に着手、平成5年3月31日に終了した。
3. 調査は高槻市立埋蔵文化財調査センターがおこなった。高槻市立埋蔵文化財調査センター所長富成哲也、次長大船孝弘の指導の下、技術員宮崎康雄、文化財専門員木曾広が調査を担当した。
4. 本書の構成・執筆は宮崎康雄がおこなった。出土遺物の撮影は清水良真が担当した。遺物の実測・製図は宮崎がおこない、仏教大学学生門田卓哉氏、関西大学学生鍋島隆宏氏の援助をうけた。遺物整理については以下の各氏の援助を受けた。厚く感謝する。  
赤木規子・池田葉子・井上明子・釣田育子・黒住照水・小松尾智代・斎藤政子・島内十糸子・立岩美津子・高村佳子・滝川恵子・棚村洋子・梅 靖代・西田佳子・温井育子・橋本京子・廣瀬瑞子・藤田伴代・古川友美子・森田哲子・山内佐紀・吉岡志津子・吉田美恵子・渡辺博美
5. 本書の造構実測図の方位は国土座標（第VII座標系）による座標北をさし、レベルはすべてT. P. を用いて表示した。
6. 土層の色調については、『新版標準土色帖 11版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1991年）を使用した。
7. 調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局茨木工事事務所をはじめ、関係機関各位の協力を得た。

## 目 次

I.はじめに	
1. 位置と環境	1
2. 調査に至る経過	2
II. 調査の概要	
1. 調査の方法	3
2. 遺構	3
3. 遺物	9
III. まとめ	14

## 挿 図 目 次

図. 1 古曾部遺跡とその周辺	1
図. 2 調査位置図	3
図. 3 壊穴住居跡1・2平面図・断面図	3
図. 4 環濠土層図	4
図. 5 溝1土層図	5
図. 6 溝2土層図	5
図. 7 西側調査区平面図	6
図. 8 東側調査区平面図	7
図. 9 遺物実測図(1)	10
図. 10 遺物実測図(2)	13
図. 11 古曾部遺跡全体図	15

## 図版目次

口 絵1 東から見た調査区

口 絵2 壺穴住居跡と環濠

図版第1 a. 古曾部遺跡全景（空中写真）

図版第2 a. 調査区全景（空中写真）

b. 遺構分布図

図版第3 a. 調査区全景（南西側から）

b. 壺穴住居跡1・2（東側から）

図版第4 a. 環濠（東側から）

b. 環濠（西側から）

図版第5 a. 溝1（南側から）

b. 溝1（西側から）

図版第6 a. 溝2（西側から）

b. 溝2（南側から）

図版第7 a. 隣接調査区の環濠（東側から）

b. 隣接調査区の環濠（西側から）

図版第8 環濠出土土器

図版第9 環濠出土土器

図版第10 環濠出土土器・鉄鏃

図版第11 a. 石製品

b. 石製品

# I. はじめに

## 1. 位置と環境

大阪府北部に位置する高槻市は、市域の北半を北摂山地、南半を三島平野が占め、その接点には標高100m前後の丘陵がひろがる。この丘陵は砂・礫・粘土などが互層となる大阪層群という地層で構成されている。地山がもろい地層であるために、侵食が進み、各所に急峻な斜面をもつ開析谷が刻みこまれている。このうちJR高槻駅の北側にある丘陵は高槻丘陵（通称天神山丘陵）とよばれ、市内でも遺跡が集中する地域のひとつにあげられる。ここには銅鐸の出土した弥生中期の天神山遺跡をはじめ、後期の奥天神遺跡・芝谷遺跡・古曾部遺跡・紅葉山遺跡などの高地性集落が営まれる。さらに眼下の平野部には拠点的集落、安満遺跡が展開している（図1）。

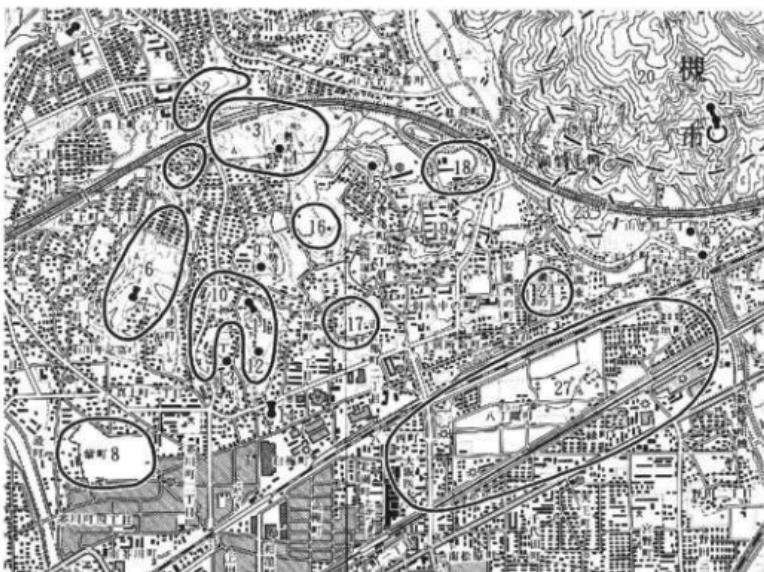


図1 古曾部遺跡とその周辺

高槻・淀 (1:25000)

- |            |             |               |            |           |
|------------|-------------|---------------|------------|-----------|
| 1. 芝谷古墳    | 2. 芝谷遺跡     | 3. 古曾部遺跡      | 4. 古伊勢車塚古墳 | 5. 惠天神山古墳 |
| 6. 慈願寺山遺跡  | 7. 慈願寺山古墳   | 8. 苍川遺跡       | 9. 伊勢車塚古墳  | 10. 天神山古墳 |
| 11. 中村古墳   | 12. 古曾部南遺跡  | 13. 天神山兩岸山土地区 | 14. 神坂古墳   | 15. 安満古墳  |
| 16. 宮山遺跡   | 17. 古曾部之庄遺跡 | 18. 紅葉山遺跡     | 19. 安満古墳   | 20. 天神山古墳 |
| 21. 伏見之庄古墳 | 22. 手杜古墳    | 23. 紅葉手杜古墳    | 24. 塙堀古墳   | 25. 安法古墳  |
| 26. 法難寺瓦窯跡 | 27. 安満遺跡    |               |            |           |

古曾部遺跡は標高60～90mの尾根上に位置している。ここからは遠く六甲山や和泉山脈をも見通すことができる。これまでわずかな遺物が知られる以外には、遺跡の実体は明らかでなく、その範囲も遺物の分布状況から東西・南北ともに約300mと推定されるのみであった。そのようななか、平成3年9月より大規模な宅地造成に先立って実施した調査では、急峻な斜面に掘削された環濠に囲まれる弥生時代後期初頭の集落を検出し（図版第7）、しだいにその姿があきらかになりつつある。

## 2. 調査に至る経過

日本の大動脈ともいえる中央自動車道西宮線（名神高速道路）では、その交通需要に見合った容量を確保するために京都南IC～吹田IC間についての車線拡幅事業が行われている。このようななか、平成3年度から名神高速道路南側隣接地において古曾部遺跡の発掘調査が実施された結果、遺跡が拡幅事業予定地内にも及ぶことがあきらかとなった。このため、日本道路公団大阪建設局、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会の三者は協議を重ね、日本道路公団からの受託事業として高槻市教育委員会が事前に発掘調査を実施することとなった。

## II. 調査の概要

### 1. 調査の方法

調査地は大阪府高槻市古曾部町5丁目・宮が谷町・別所本町に位置し、小字はケタガ谷・池ノ内である。名神高速道路下り線側に長さ約250mにわたって調査区を設定し、成合橋を境に東側調査区・西側調査区と呼称した。また、上り線側には遺構の広がりを確認するために2か所のトレンチを設定した（図2）。

調査は防災作業完了後、重機により表土・盛土等を除去し、その後人力による掘削をおこない遺構・遺物の検出につとめ、記録作業をおこなった。調査面積は約1800m<sup>2</sup>である。

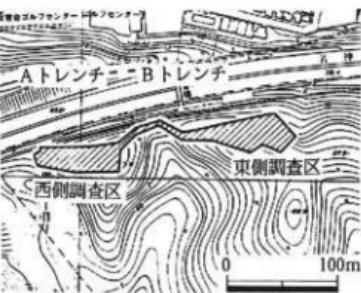


図2. 調査位置図

### 2. 遺構（図版第1～6、図3～8）

検出した遺構は竪穴住居跡、環濠、溝である。これらの遺構は調査区の両端に統く尾根上で検出した。

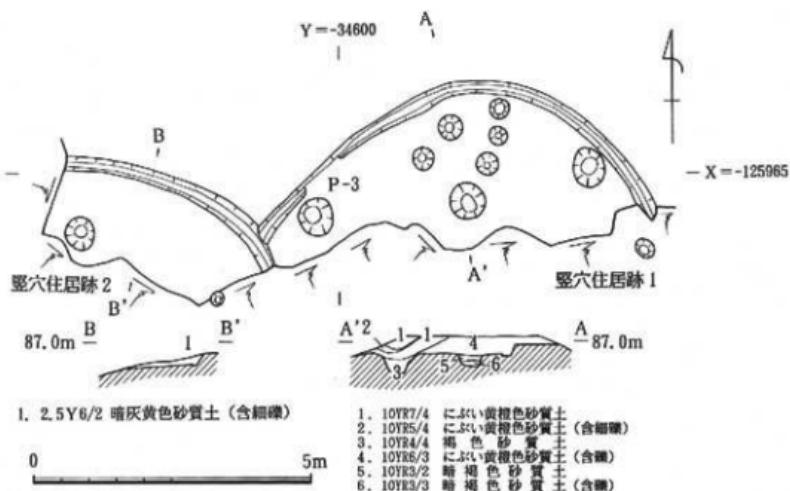


図3. 竪穴住居跡1.2 平面図・断面図

豊穴住居跡1は、東側調査区の尾根上で検出した。土砂の流出や後世の擾乱をうけているために、部分的な検出にとどまり、全容を知ることはできなかった。規模は復元値で7m×6.5mをはかり、平面形は隅丸方形を呈している。柱穴は直径0.3~0.6m、深さ約0.2mをはかる。P-3の底からは柱状片刃石斧が1点出土した。周壁溝は幅0.2m、深さは床面から0.05mである。北東部では長さ約0.8mにわたって途切れていた。あるいは出入り口かもしれない。豊穴住居跡2を切っている。

豊穴住居跡2は豊穴住居跡1の西側で検出した。やはり擾乱のために一部分のみの検出ではあるが、平面形は1辺約6mの隅丸方形に復元できる。柱穴は直径0.5m、深さ0.2mをはかる。周壁溝は幅0.2m、深さは床面から0.02mと浅い。

環濠1は、東側調査区を東西にのびる主尾根の北斜面に沿って約30mにわたって検出し、さらに調査区外へと続いている。北側の肩はすでに崩落していたが、現存幅7m、深さ約5mをはかる。断面の形状は逆台形を呈している。傾斜角は南側で最大55度、最小35度をはかるが、掘削後の崩落を考慮すれば、掘削時は50度前後の傾斜があっ

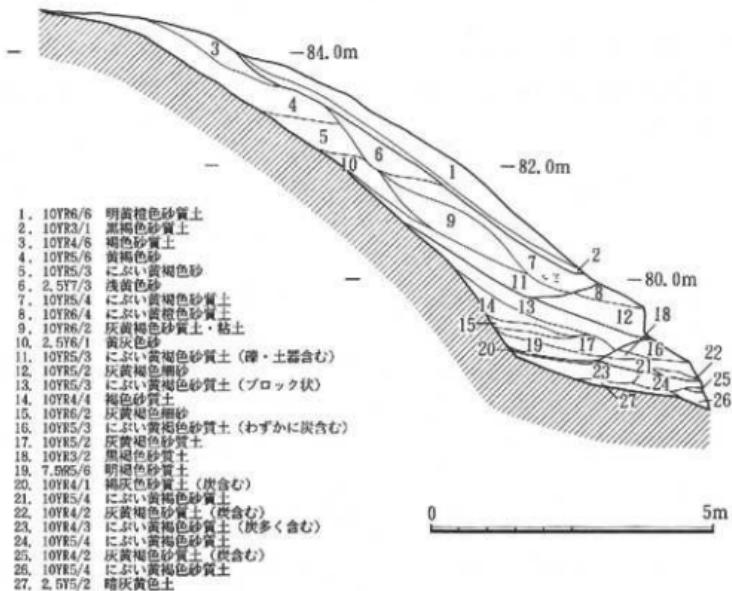


図4. 環濠土層図

たとみられる。堆積がすすんだ時点で溝さらえをおこなっている。環濠2を切っている。弥生後期前半頃の土器が出土した。

環濠2は環濠1よりやや北側(谷側)寄りで検出した。環濠1に切られているために全体の規模はあきらかではないが、断面は逆台形を呈し、もっとも残りのよい西側で幅7m以上、深さ3.5m以上あり、傾斜は南側で55度をはかる。検出長は30m、中央から西側にかけては底で約1.5mの段差をもって調査区外へつづいていく。

これらの環濠を追及するために、名神高速道路北側の尾根に幅1m、長さ6mのトレンチを2カ所(A・Bトレンチ)設定したが、表土・腐食土を除去するとすぐに地山となり、遺構・遺物を検出することはできなかった。

溝1は西側調査区の南北にのびる尾根で検出した。尾根上の平坦部南端を断ち切るように掘削されており、検出長22m、幅4~7m、深さは最大値で約1.5mである。断面の形状は逆台形を呈している。南側の肩は一部削平されているか断面を見る限り、盛土や棚列などは認められない。

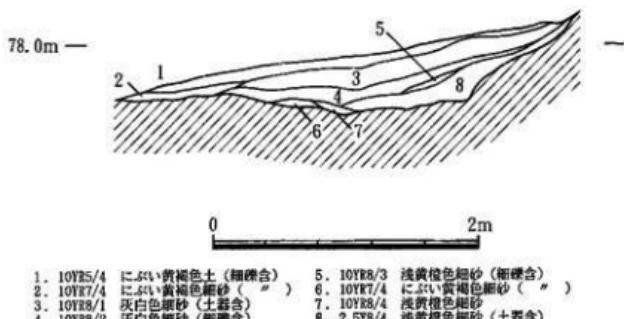


図5. 溝1土層図

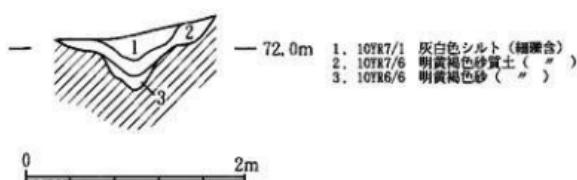


図6. 溝2土層図

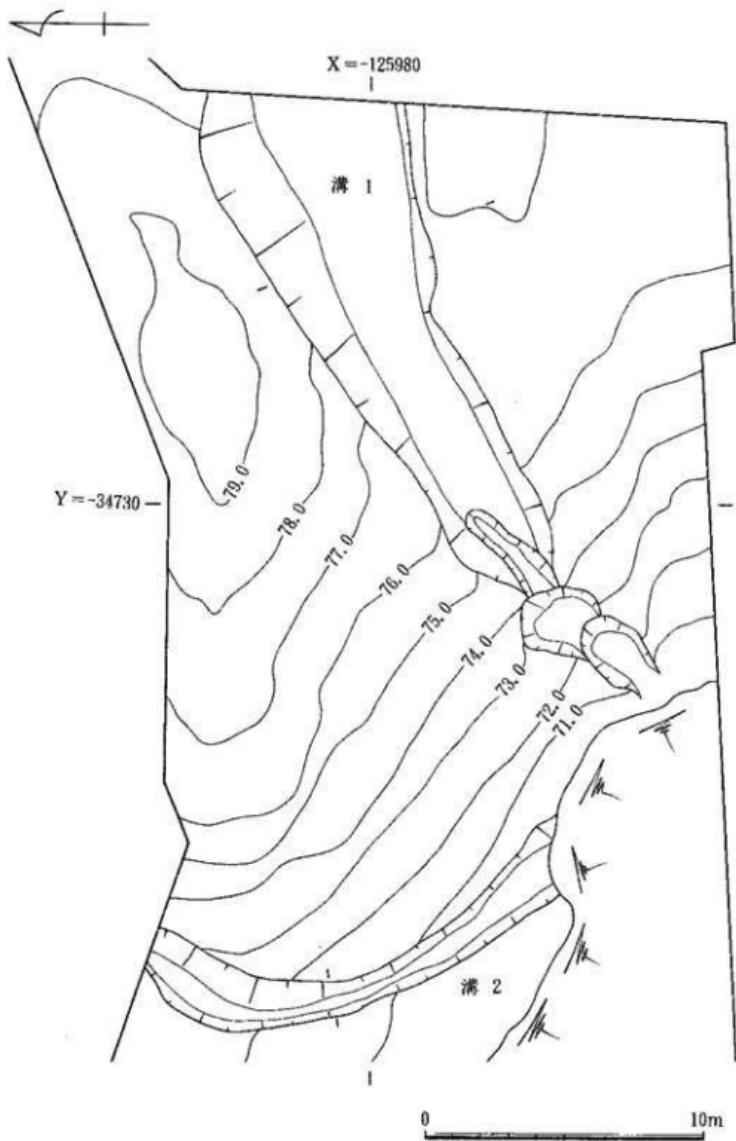


図7. 西側調査区平面図

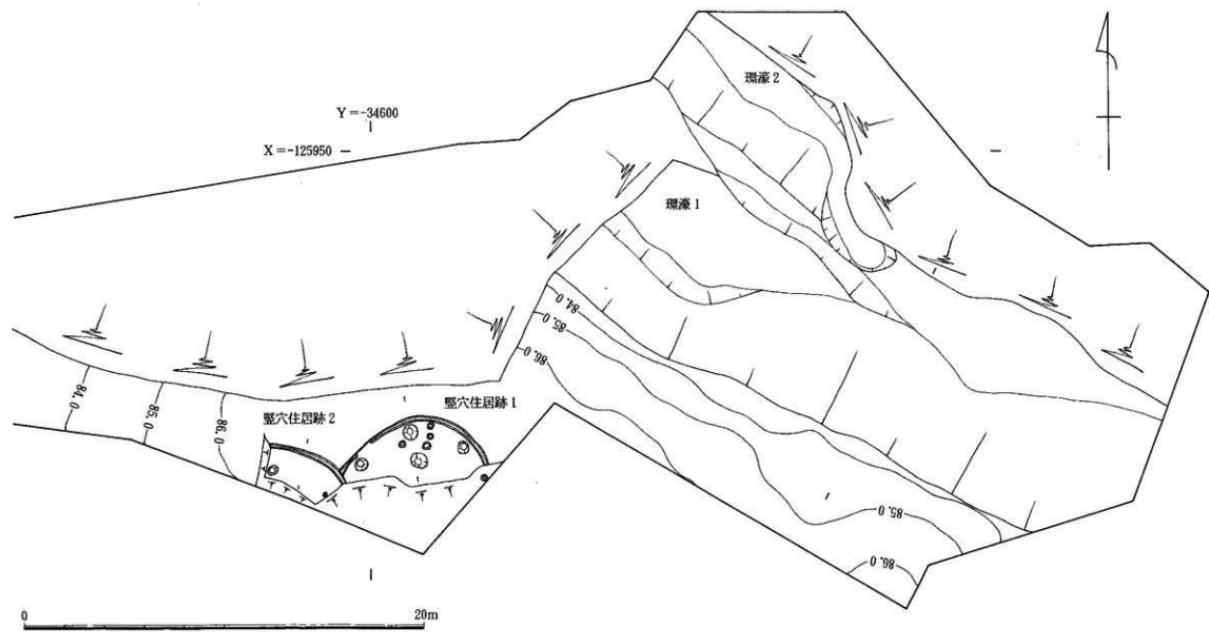


図8. 東側調査区平面図

溝2は西側調査区西斜面の中腹で検出した南北溝で、両端は調査区外へつづく。検出長17m、幅約1~1.5m、深さ0.7mをはかる。斜面に平行するように掘削され、南側は谷底へむかって緩やかに傾斜している。

### 3. 遺物(図版第8~11、図9・10)

調査区内からはコンテナ約80箱の遺物が出土した。わずかな石製品、鉄製品以外はすべて弥生土器である。このうちの約60箱が環濠から出土している。以下にその概略を述べる。

#### 土器(1~15)

いずれも環濠1からの出土である。

広口壺(1)は口径12.4cm、器高25.5cm、最大径19.7cmをはかる。色調は明茶褐色を呈し、胎土中には5mm大の砂粒が比較的多く含まれる。調整は内面がナデ、外面は頸部および体部下半がタテハケ、体部上半がヨコハケである。2は口径10.3cm、器高17.3cm、最大径14.6cmをはかる。色調は明褐色を呈し、内面はナデ、外面は縦方向のヘラミガキを施す。

長頸壺(3)は口径12.8cm、器高28.3cm、最大径18cmをはかる。色調は茶褐色を呈している。調整は内面下半がハケ、上半はなでている。外面はヘラミガキを施している。体部下半には竹管刺突による記号文がある。

短頸壺(4)は復元口径9.4cm、器高17.2cm、最大径は11cmをはかり、色調は黄灰色を呈している。外面の調整はタテハケである。5は口径9.4cm、器高23cm、最大径1.2cmである。色調は明黄褐色を呈している。調整は内面ナデ、外面は水平方向のタタキ後になでている。全体に調整は難である。6は口径5.4cm、器高8.7cm、最大径11.3cmをはかる。色調は明褐色を呈している。調整は内外面ともにハケである。底には直径1.5mmの孔を2か所穿っている。

高杯(7)は口径15.8cm、現存高7cmをはかり、脚据部分を欠く。内外面ともハケ調整、口縁部はヨコナデを施している。穿孔は3ヵ所である。8は口径25.7cm、底径14.2cm、器高17.2cmをはかる。内外面とも粗いハケ調整の後にかるくなれる。1ヵ所に穿孔する。色調は黄褐色である。9は口径12.6cm、底径7.4cm、器高10.4cmをはかる。色調は黄茶褐色を呈している。口縁部はヨコナデ、他はヘラミガキを施す。10は口径24.6cm、底径12.4cm、器高22.2cmをはかる。色調は明茶褐色、細部の調整は風化が著しいために不明である。

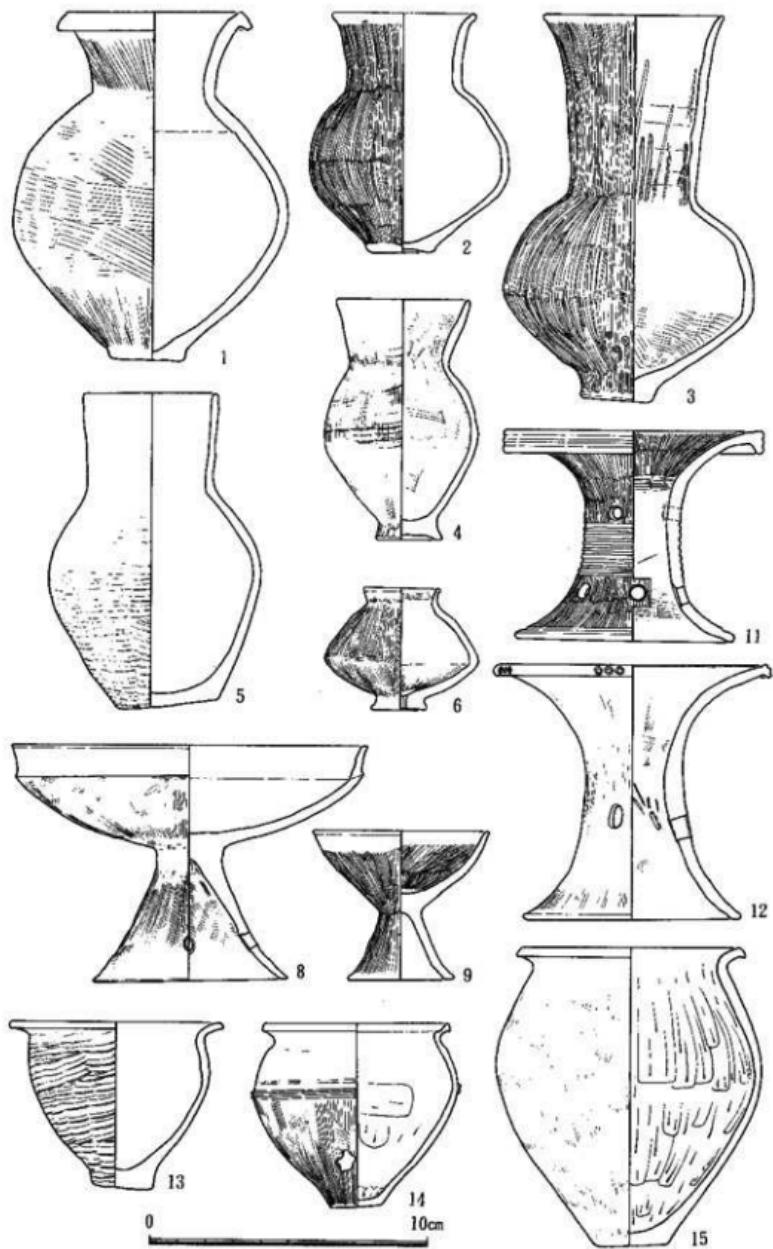


図9. 造物実測図(1)

器台（11）は口径18.7cm、底径15.8cm、器高15.4cmをはかり、色調は黄茶褐色を呈している。口縁端部は下方に拡張し、2条の凹線を施す。胴部には5かと所の円孔を上下2段に穿ち、その間に8条の沈線を施す。ハケ調整の後にヘラミガキを施す。12は口径20cm、底径15.7cm、器高18.6cmをはかる。色調は灰褐色を呈し、全体にハケ調整をおこなう。胴部下半には椭円形の透かしを3方向に穿つ。

鉢（13）は口径15.4cm、器高12cmで、色調は暗黄褐色～灰褐色を呈している。体部下半を水平方向、上半はやや右上りのタタキを施す。14は口径13.2cm、器高13.3cmをはかる。体部の最大径をはかる部位に、中央に1条の沈線を施した幅6mmの凸帯を巡らしている。外面はタテハケ、内面はヘラケズリ後になでている。口縁は受け口状を呈すが、近江系のものとは異なるようである。

壺（15）は口径15.6cm、腹部18.8cm、器高21.6cmをはかる。調整は内面が頸部までヘラケズリを施し、口縁部ヨコナデ、外面はタテハケである。色調は灰褐色～明黄褐色を呈し、上腹部から口縁にかけて煤が付着する。色調は淡茶褐色～灰褐色である。なお、図示していないが近江産の壺もわずかに出土している。

#### 鉄製品（16）

鉄鎌（16）は茎の先端が欠損している。法量は現存長7.6cm、幅3.4cm、厚さ0.4cm、重量15gである。環漆廃絶後の堆積土中より出土したもので、形態からみて古墳時代中期頃とおもわれる。

#### 石製品（17～27）

石鎌（17）は凸基式で、石材はサヌカイトである。全長3.5cm、最大幅1.35cm、厚さ0.45cm、重量4gである。端部は丸みをもつ。環漆崩落面より出土した。18は現存長6.45cm幅3.5cm、厚さ1.5cmをはかる。石材はサヌカイトで、形状から打製短剣の未製品とかんがえられる。環漆1出土。

石錐（19）は現存長3.1cm、最大幅3.2cm、をはかる。サヌカイト製で、錐部先端を欠く。西側調査区で出土した。20はサヌカイトの剝片である。刃部にわずかに調整がみられる。削器かもしれない。

石包丁（21）は4.75cm×4.3cm小片である。緑色片岩製で、片側は剥離する。孔径は5mmをはかり、背側には摩減痕が看取できる。

大型蛤刃石斧（22）は現存長10.4cm、幅6.8cm、厚さ4.2cm、重量500gをはかる。折損後に叩き石として転用されたもので、基部には敲打痕がのこる。西側調査区から出土した。23は隣接調査区より出土した扁平片刃石斧である。磨製石斧のセット関係

を示す参考資料として掲載したものである。

柱状片刃石斧（24）は竪穴住居跡1の柱穴（P-3）より出土した。全長11.6cm、幅2.9cm、厚さ3.95cm、重量300gをはかり、石材は粘板岩である。基部および刃部には敲打痕がみとめられ、側縁には装着痕らしき摩滅のあとがのこる。

石杵（25）は環濠1から出土した勾玉形石製品、L字形石杵などとよばれるものである。全長14.5cm、最大幅5.2cm、厚さ5.3cm、重量820gをはかる。側縁を面取りするように調整し、底部は摩滅している。全体に火熱を受けている。朱などの付着物質はみとめられない。石材は砂岩である。

投弾（26）は環濠1から出土した。5.2cm×4.2cmの卵形をなし、重量は110gである。石材は地山中には存在しない安山岩である。

軽石（27）は環濠1から出土した。搬入されたことはあきらかであるが、とくに使用した痕跡も無く、その用途は不明である。

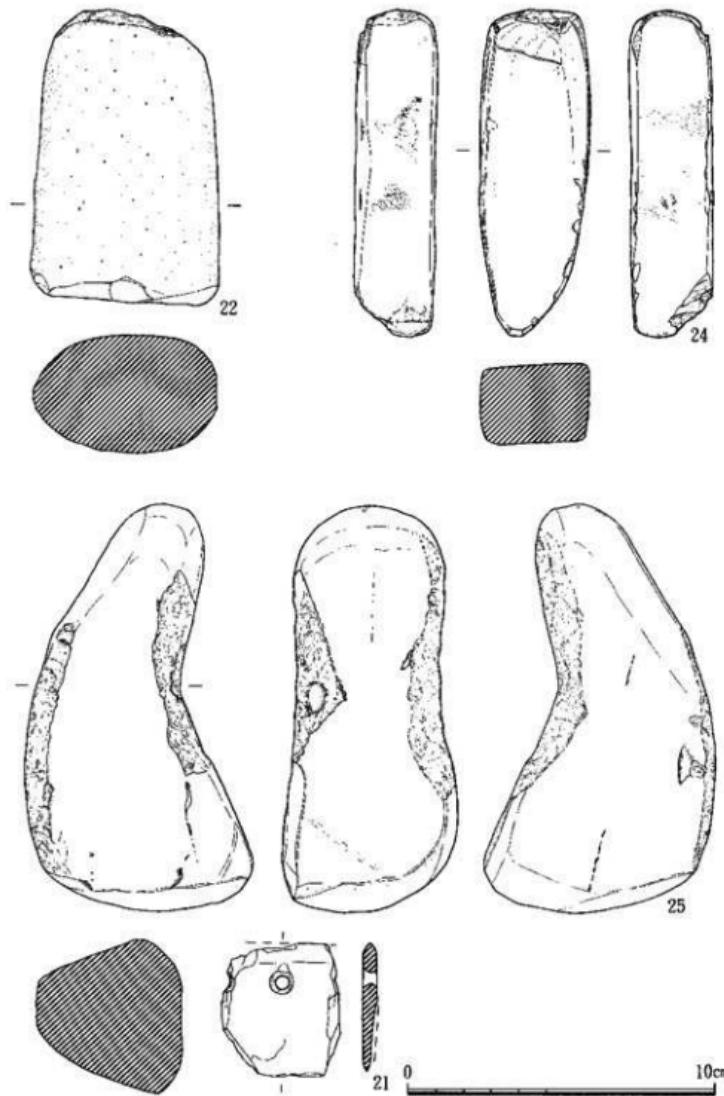


图10. 遗物实测图 (2) 石包丁 (21)、太形蛤壳石斧 (22)、柱状片石斧 (24)、石杵 (25)

### III. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期初頭～前半頃の竪穴住居跡、環濠、溝を検出した。古曾部遺跡では、これまで環濠の内外に竪穴住居が数棟づつまとまつた5か所の居住域が判明しているが、今回東側調査区でも竪穴住居を検出したことによって、環濠で囲まれたなかにもう1か所の居住域を確認することができた。各居住域には円形ないし隅丸方形の住居がかならず1棟は尾根上に建てられており、当該区も同じ状況といえる。切りあっている2棟のみの検出であるので一時期には1棟しか存在しないことになるが、「古曾部の弥生式遺跡の遺物」(『古代学研究』第26号、1960年)において報告されている「A」・「B」2地点で検出した住居跡は、その正確な位置は不確かながら、地形や検出状況から判断すれば、本調査区かこれと接する尾根上に存在したとみることができ、このエリアには数棟がまとまっていた状況が想定できる。

いっぽう、西側調査区で検出した溝1は尾根を切るかたちで掘削される、いわゆる条溝と呼ばれるものである。これは隣接調査区での検出例のように、尾根の端部に掘削し、居住域を区画したものと考えられることから、西側調査区の尾根上にも居住域が展開していたことは容易に想定できる。

溝2は尾根の西斜面に沿うようにのび、ゆるやかに谷底へむかって下っている。この谷をたどると安溝遺跡が展開する平野部にいたることや、溝の規模、掘削状況からみれば、通路として利用していた可能性を指摘できる。

隣接地の調査で検出した2か所の環濠は、谷をはさんで約200m離てているが時期や規模等の状況から同一のものとして推定されてきた。今回の調査でも環濠を検出したことにより、これまで主尾根を分断して途切れていたとされる環濠が西へ屈曲し、さらに主尾根に沿って続いていくことが判明した。また、尾根に沿って設定された西側調査区からは環濠を検出しなかったことから、環濠が南へ向かって屈曲せずに大きく西へのびていくことがあきらかとなった。これで以前に検出した大規模な環濠はすべて同一のものであることだけでなく、大谷池が位置する谷の周囲をコの字状にのびる尾根を大きくとり囲むように続いていたことをも想定することが可能になった。

古曾部遺跡の範囲は、これまで東西・南北ともに約300mとされてきたが、今回の調査によって、東西500m、南北400mとおおきく拡がることになった。これによって西側の芝谷遺跡や奥天神遺跡とは互いに接することとなり、これら三集落はひとつの居住域として展開していたといえよう。

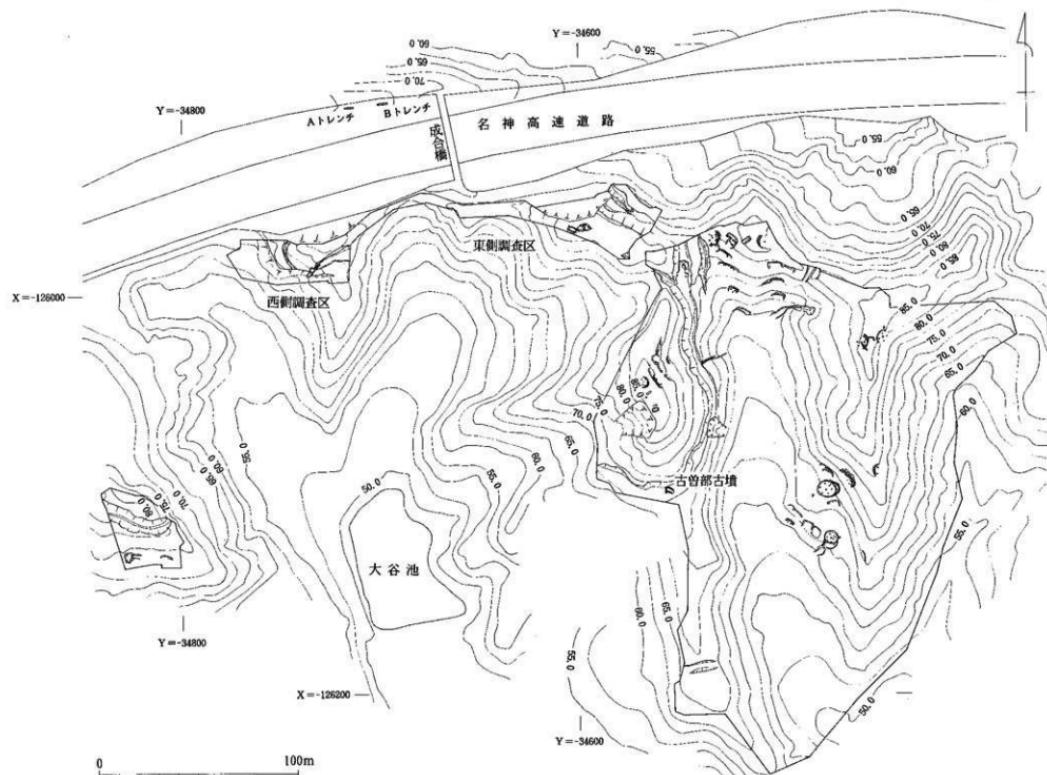
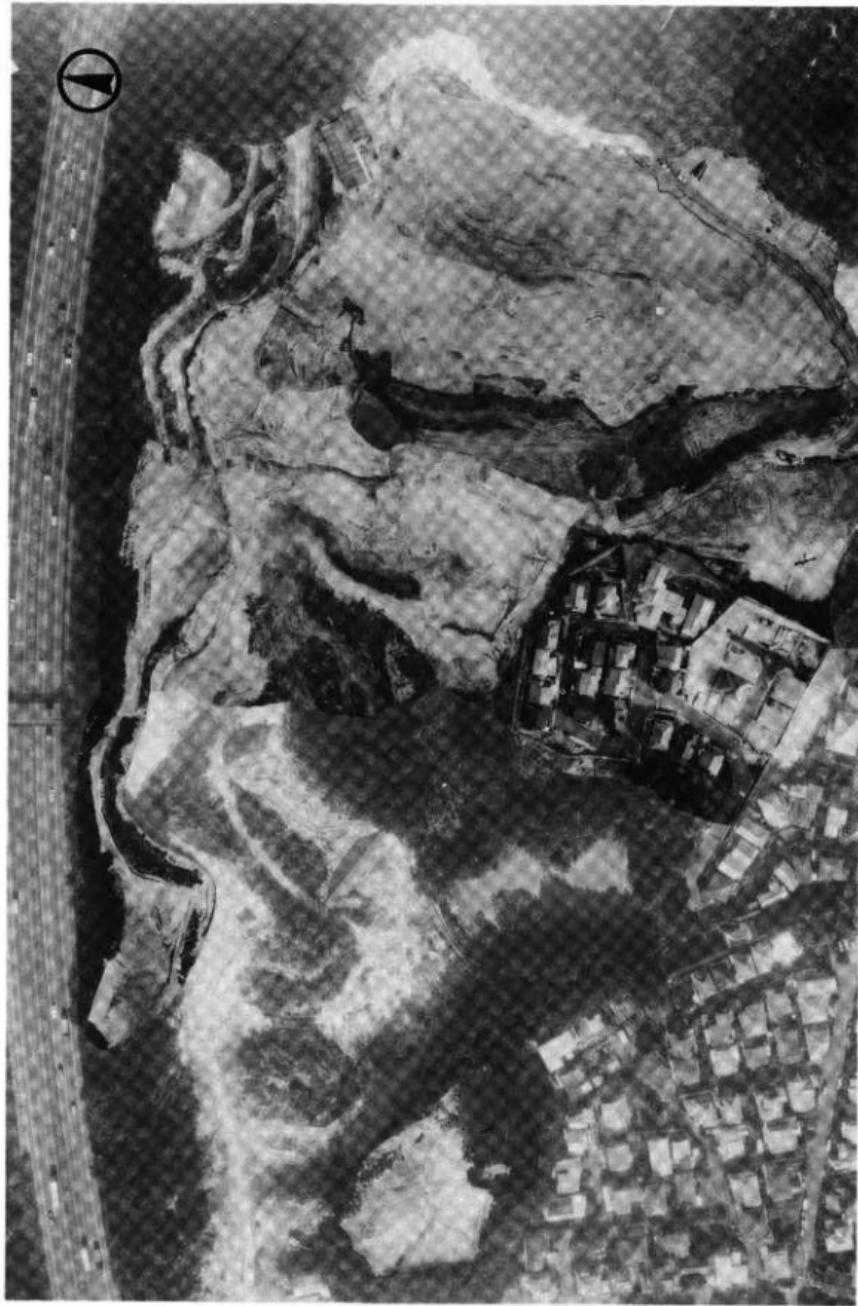


図11. 古曾部遺跡全体図

# 図 版

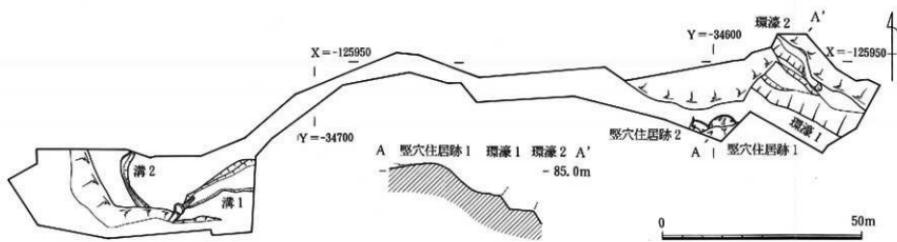




a. 古曾都遺跡全景（空中写真）

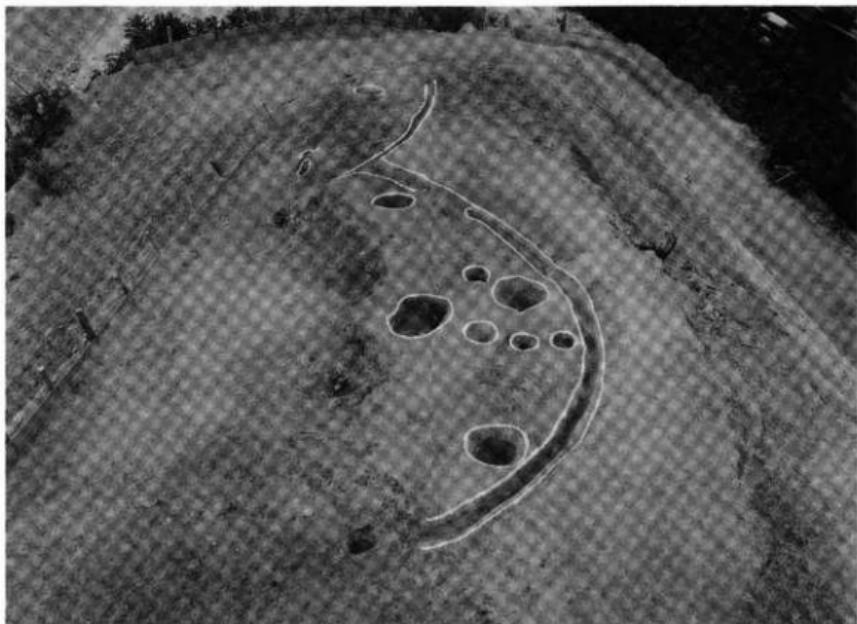


a. 調査区全景（空中写真）

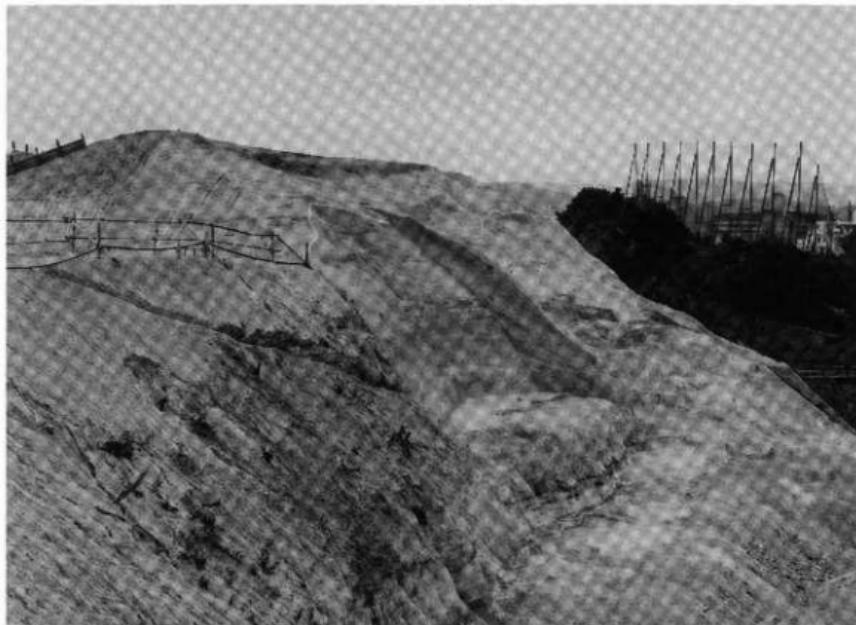




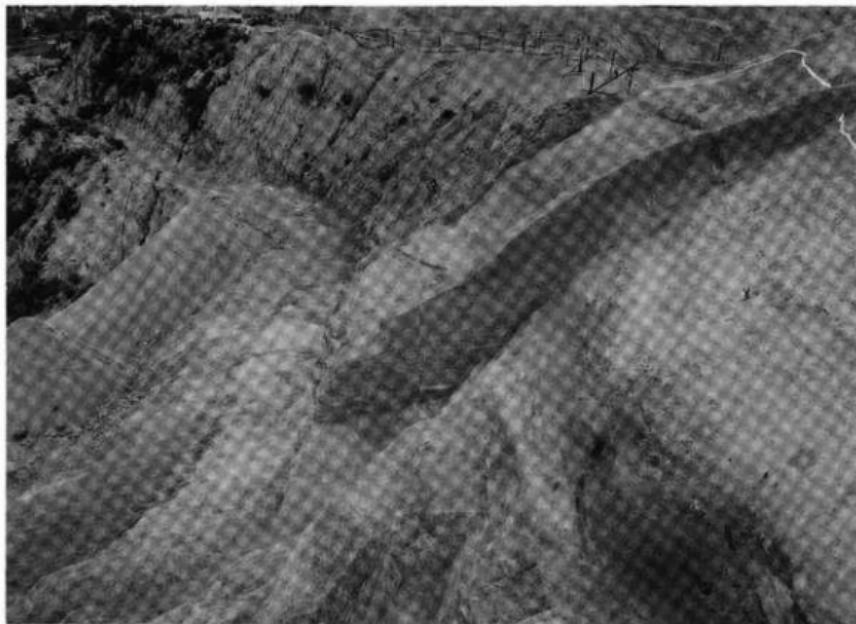
a. 調査区全景（南西側から）



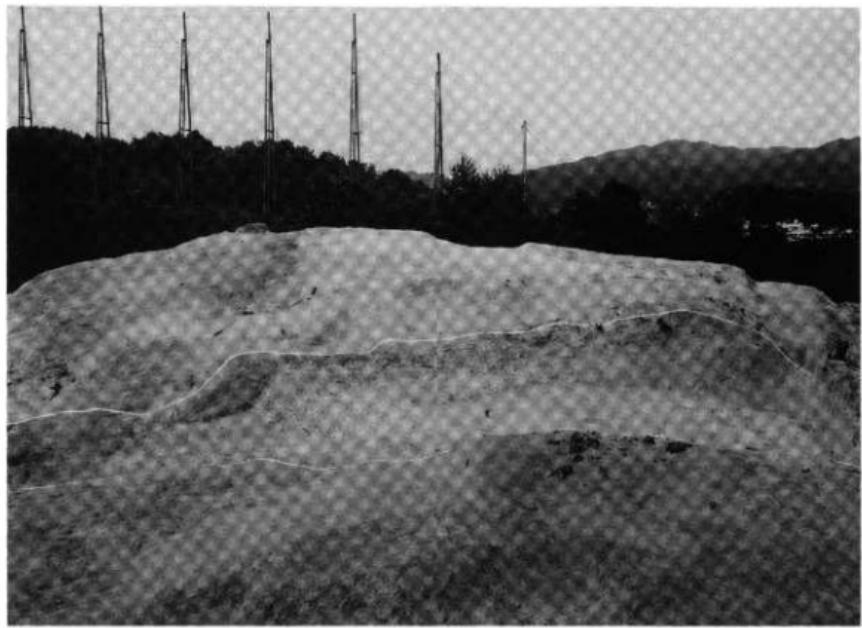
b. 穴住跡1・2（東側から）



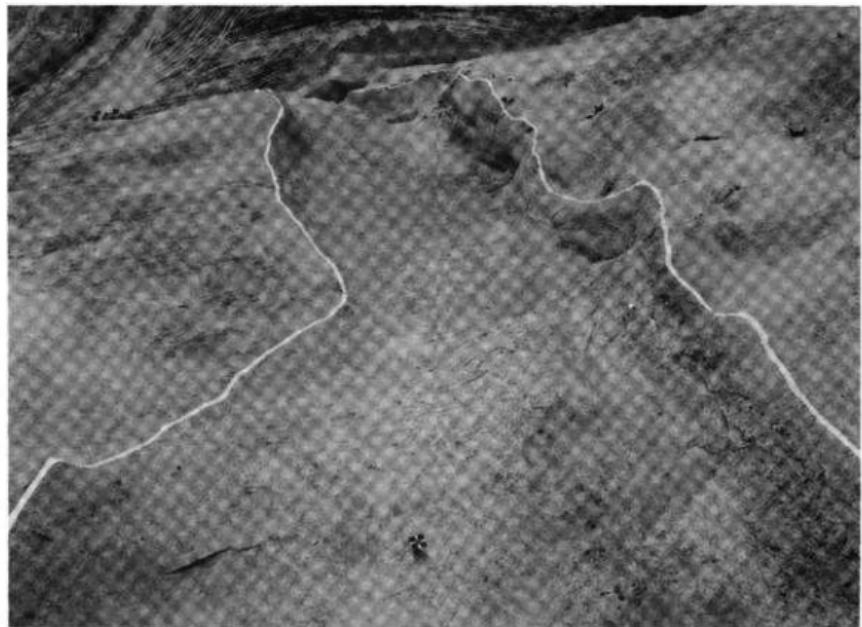
a. 環濠（東側から）



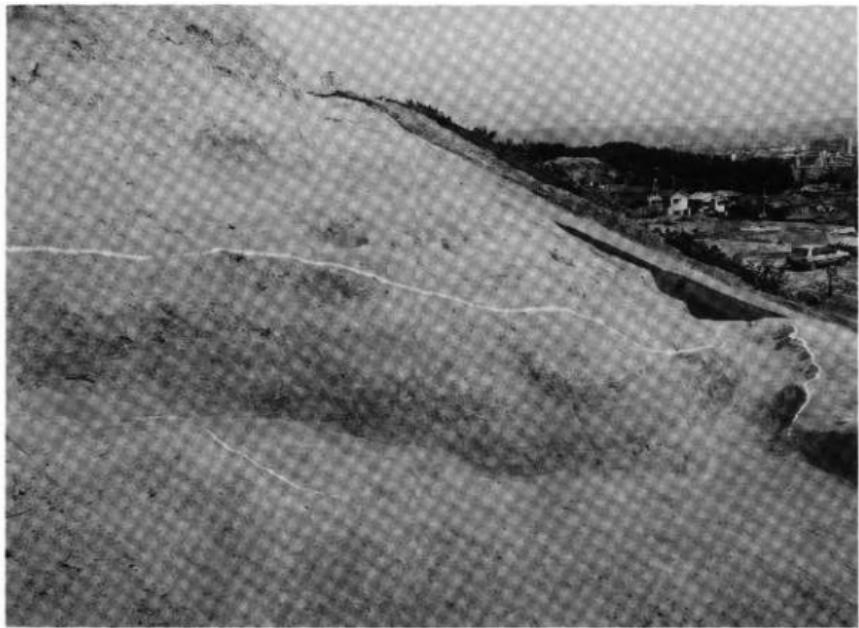
b. 環濠（西側から）



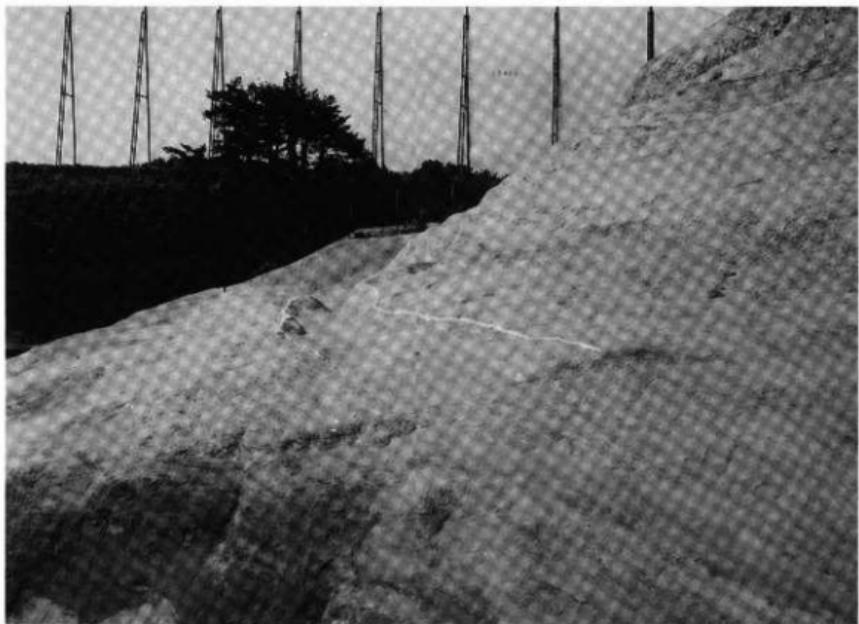
a. 溝1（南側から）



b. 溝1（東側から）



a. 溝2（西側から）



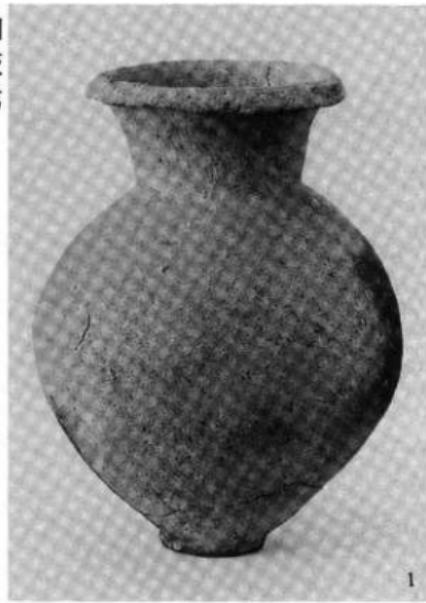
b. 溝2（南側から）



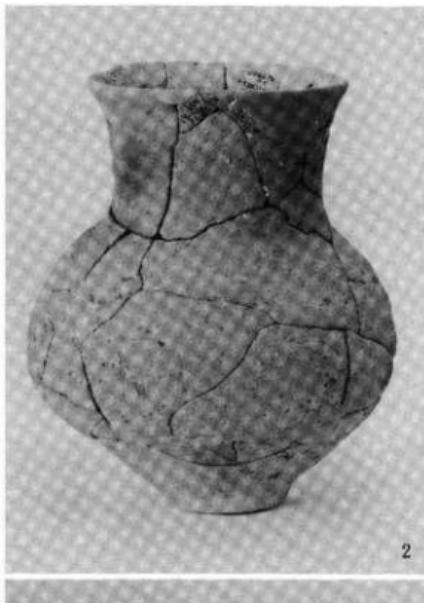
a. 隣接調査区の環濠（東側から）



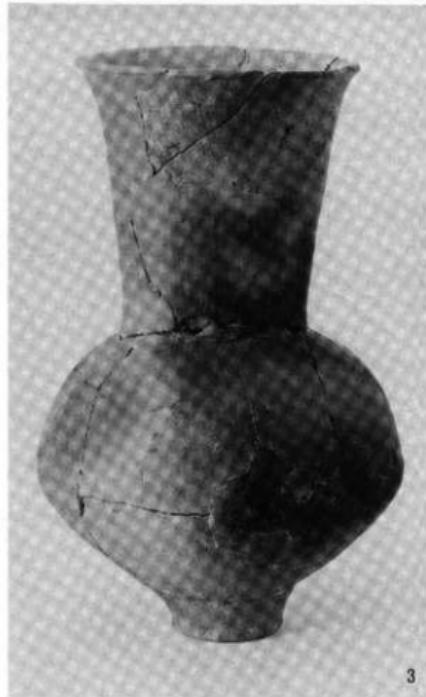
b. 隣接調査区の環濠（北側から）



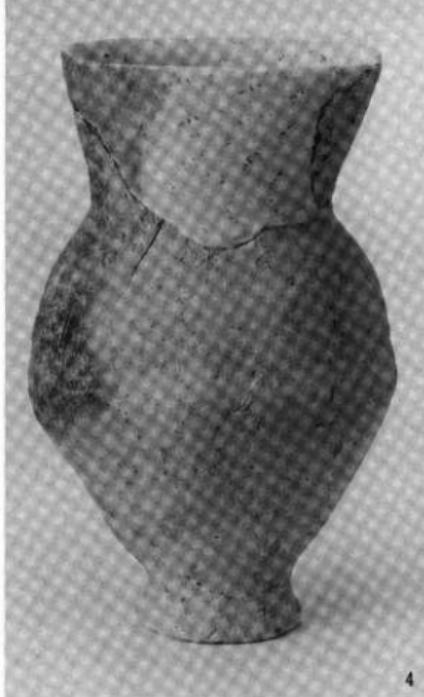
1



2

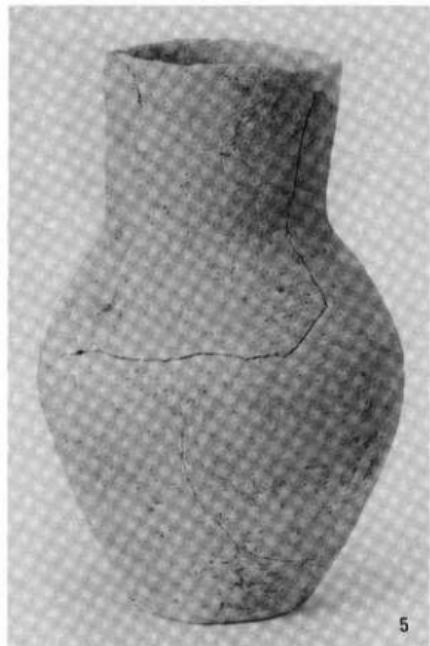


3



4

環濠出土土器（1～4）



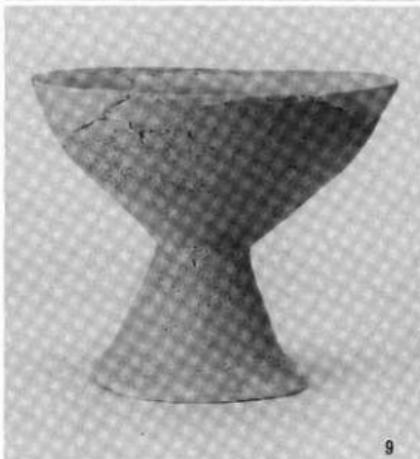
5



8



6



9



7



10

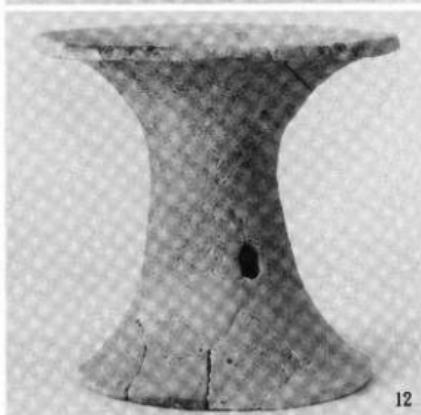
環濠出土土器（5～10）



11



13



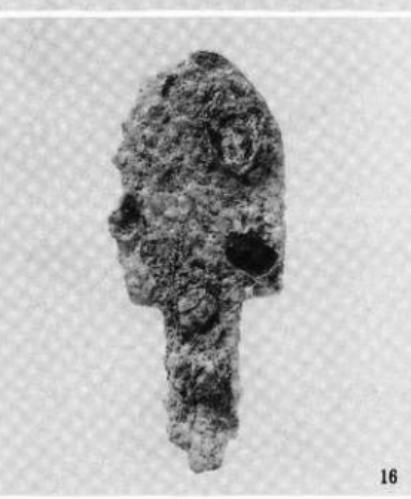
12



14

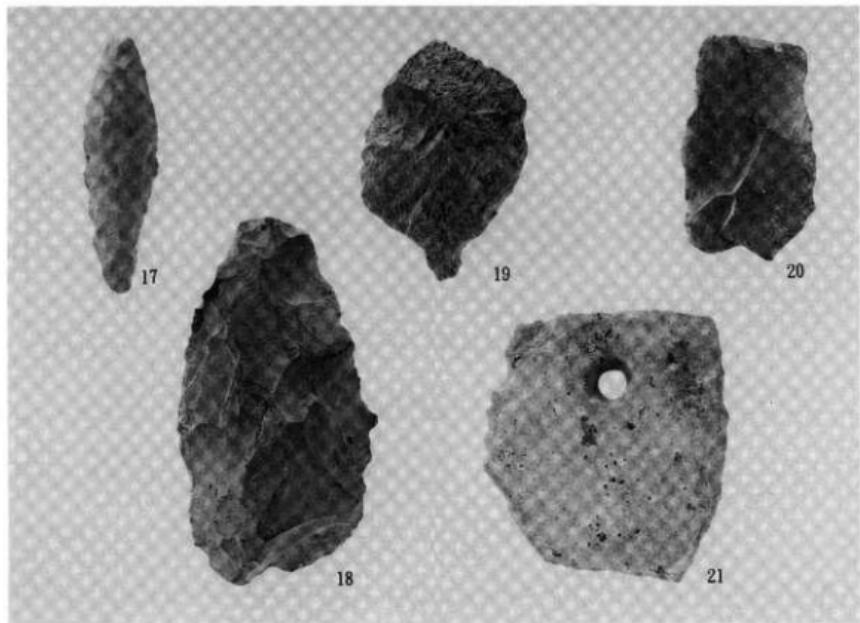


15



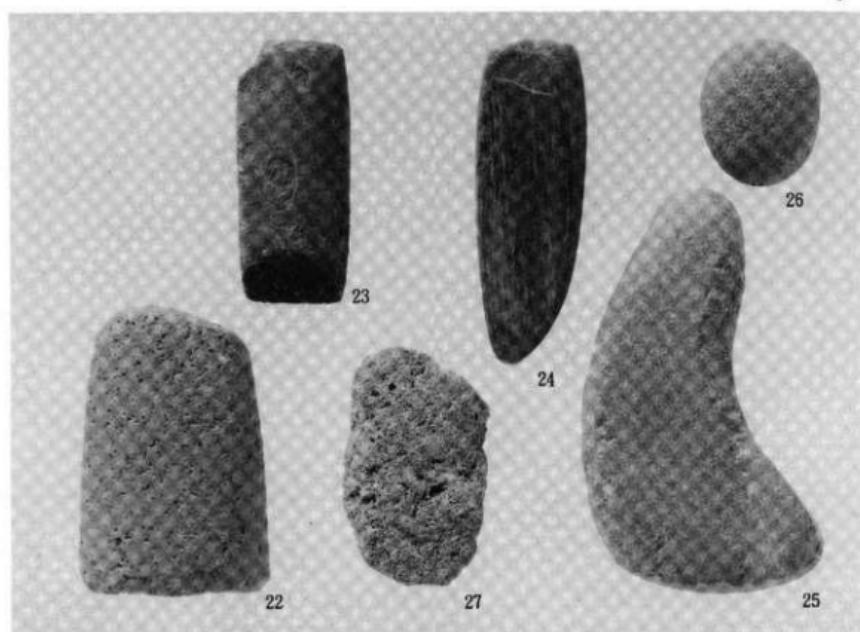
16

環濠出土土器（11～15）・鐵鎌（16）



a. 石製品

(約  $\frac{1}{2}$ )



b. 石製品

(約  $\frac{1}{2}$ )



高槻市文化財調査概要 XIX

古曾部遺跡発掘調査概要

平成 5 年 3 月 31 日

発行者 高槻市教育委員会  
高槻市立埋蔵文化財調査センター  
高槻市南平台 5 丁目 21 番 1 号

印刷者 株式会社 邦文社  
大阪市東淀川区大桐 1 丁目 4 番 9 号